

銅鐸

神戸市立博物館蔵

銅鐸は、弥生時代に製造された国産の青銅器である。中国で鐘を「鐸」と称することから明治時代以降に「銅鐸」と呼ばれるようになった。裾が広がった楕円筒型すなわち、釣鐘の形をした青銅製の鋳造物で、両側に板状に張り出した鱗と上部には半円形の鈕と呼ばれた釣手が付属する。本体上部の左右には対の孔、裾部にも対の切り込みがある。兵庫県や島根県などを中心にこれまでに全国で約500個体が出土している。愛媛県を除く四国と広島・島根県がほぼ西限で、東は福井・長野・静岡県まで広がる。ただし、出土地の偏りから銅鐸文化圏と銅矛文化圏の対立を想定する旧来からの議論は、出土数の増加によっても大まかな傾向は変化しないものの、出土地域が交錯するようになり成り立たなくなっている。

墳墓や住居跡からはまったく出土せず、村から離れた谷間の斜面に入れ子状に横に寝かせて浅く埋納された状態で出土することが多い。このため個人の所有物ではなく、共同体の所有物であったと考えられている。銅鐸の祭祀から古墳時代への変化に対応する新たな祭祀の導入により不要とされたため埋納されたと推測される。銅鐸が出土し

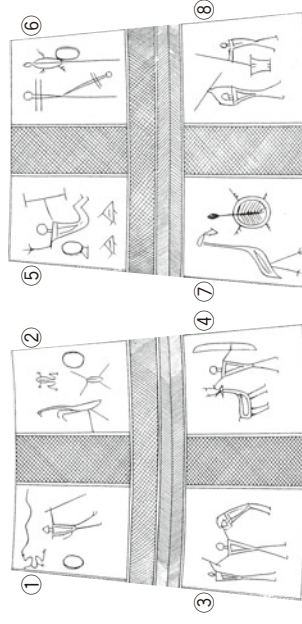
た記録は、古代の史書である『扶桑略記』『続日本紀』『日本紀略』などに見えている。

大きさは10cm程度から1mを超えるものも存在する。弥生時代後半期から急に大型化が進み、この時期は畿内で生産された近畿式と濃尾平野で生産された三遠式（三河・遠江地方から出土）の2形式に分化するが、終末期は近畿式のみとなる。身の部分には縦横の文様帯が交差し、人物や動物などを描いた原始的な絵画が鋳出されているものもある（見る銅鐸）。関係するものとしては、小銅鐸や鋳型も出土する。

中国の銅鈴や朝鮮の小銅鐸が起源とされるが、わが国で独自に発展したと考えられる。用途は明らかではないが、前期の銅鐸は鈕の下部に吊した痕跡である「擦れ」の痕や内部に圧痕があり、外面にはそうした痕跡がないことから、梵鐘のように外側から叩くのではなく、木石や鹿角製の「舌」を垂らして鳴らしたことが推測されている（聞く銅鐸）。

鳴らす性質はすぐに喪失するが、しばしば赤色顔料の彩色が残ることから祭祀に用いられたことが推測される。やがて大型化が進み、鈕が薄手となり、実用から装飾化したことなどから推測して、音を出して「聞く銅鐸」から、祭殿などに設置して「見る銅鐸」に変化したと考えられている。

絵のある銅鐸は50個体ほどで、それほど多くはないが、とりわけ神戸市立博物館蔵の桜ヶ丘神岡5号銅鐸に描かれた絵画は著名である。この銅鐸



桜ヶ丘5号銅鐸（兵庫県教育委員会「神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅矛調査報告書」より、昭和44年3月）

の側面には前後に、田形に描いた4場面ずつ、合計8面に当時の生活の様子を描いている。その図柄は、①逃げる蛙の足を蛇がくわえ、三角頭の人（女性）が棒を持つ、②カマキリと蛙とクモ、③丸頭の人（男性）、④I字形の道具（糸巻き）を持つ丸頭の人と3匹の魚、⑤トンボ2匹とイモリ、⑥魚をくわえるサギとスッポン、⑦左右に分かれた三角頭の人材が杵を用いて臼で収穫した米を脱穀する場面、などが描かれている。

これら連作された絵の全体的な解釈については、多様な解釈があり定説はまだない。①日常生活や環境を題材に水田風物詩を描いたとする説、②年中行事や季節を描いたとする説、③狩り・脱穀などをモチーフとする説、④農作物の害虫を捕食する動物を描き、豊作を祈願したとする説、⑤弱肉強食と農耕を対比して、稲作がすばらしいことを賛美しているという説、などが提起されている。

（国立歴史民俗博物館教授 仁藤敦史）